

要 旨

人々の行動は周囲にどのような人がいるかによって大きな影響を受ける。身近な人（ピア；英語で「仲間」の意）が自分の行動やその成果に与える影響をピア効果と呼び、教育経済学においては、生徒の学力が、同じ学年・クラス・班などに所属するピアからどのような影響を受けるのかが注目される。ピアの生徒構成によって学力向上についての有利・不利があるとすれば、不利な構成のクラスに経験豊富な教員を配置するなど、教育資源の配分に知見を役立てられると考えられる。また、ピア効果の起こるメカニズムが明らかになることによって、効果的な指導法に関する示唆が得られる可能性もある。本書の目的は、学校におけるピア効果、特にピアの男女構成がもたらす効果を指す「性別ピア効果」に関するこれまでの研究を概観し、また日本の学校を対象として行っている筆者の研究を紹介することで、日本における性別ピア効果研究の議論を深めることだ。

ピア効果の立証のために、例えば女子比率が高い学校の生徒と女子比率が低い学校の生徒同士を比べようとする場合、その生徒同士は所属校の女子比率以外においても異なる性質を持ち、比較可能でない可能性が高い。その場合、ピアの女子比率と自身の学力の相関を因果効果とみなすことはできない。そのため、ピア効果を対象とした研究においては、異なるピアグループの生徒同士の比較可能性を担保するため、いくつかの工夫がなされてきた。代表的な手法の一つは、同じ学校の中の異なる学年を比較することだ。例えば、同じ学校の中では、昨年度入学した集団と今年度入学した生徒の集団の間で男女比率には変化がある可能性があるが、生徒の特性は似通っており比較可能だとみなせる。性別ピア効果はこの方法によって推定が可能であり、海外には比較的研究蓄積がある。しかし、性別ピア効果が発生するメカニズムについては一致した見解が得られておらず、先行研究の結果が日本でも当てはまるかどうかは明らかでない。

そこで筆者は、日本の学校における性別ピア効果とそのメカニズムを明らかにすることを目的とし、「埼玉県学力・学習状況調査」を利用した研究を行っている。これまでに得られた結果では、ピアの女子比率の上昇による女子の学力への好影響が示されたが、男子の学力に有意な影響は無かった。この点から、本研究のデータにおいては、先行研究で主張されているものとは異なるメカニズムが作用していることが推測される。というのは、主要な先行研究は、男子についても女子比率上昇の好影響を報告しており、そのメカニズムとして、女子比率の上昇が男子による問題行動の減少につながり、授業環境が改善されるためだと主張しているからだ。さらに分析を行ったところ、女子児童は、女子比率が高まると、学習上の困難に直面したときに友達に勉強のやり方を聞く傾向を強めることがわかった。一方で、男子児童は、勉強するときに友達と答え合わせをする傾向が弱まり、学習習慣の悪化も確認された。ここから、女子比率が上昇すると女子は友人とより協働して学習するようになるものの、男子の学習へのコミットメントは低下することが示唆される。さらなる検証によってメカニズムを解明し、政策的に活用できる知見を得ることを今後の課題としたい。

以 上